

夕霧の恋——夕霧巻における——

大井田 晴彦

はじめに

王朝物語には、「まめ人の恋」とも称すべき一連の物語の系譜があるらしい。『伊勢物語』百三段、『うつほ物語』の源宰相実忠、『源氏物語』の鬚黒大将、そして夕霧の物語などが挙げられる。浮気などとは無縁で幸福な家庭を築いていた誠実な男が、ある時一転して恋の奴となり周囲を顧みなくなる。もとより真面目で一途な性格であるだけに、その盲目的な恋は、色好みのそれよりも始末に悪い。深刻な家庭悲劇を出来させることも少なくない。本稿では、「夕霧」巻の夕霧を中心に「まめ人」の恋について考えたい。それまで自他ともに認める「まめ人」であった夕霧が、恋物語の主人公らしく振る舞うことから生じる悲喜劇が、この巻に語られる。「まめ」を信条とし、冷静に物事を分析・観察していた彼が、主体的・積極的に行動していくが、それは従来のものである落着いた人物像とはかなり異なるものであった。

祖母大宮のもとでいとこの雲居雁との幼恋を育んだ彼は、彼女の父内大臣に仲を裂かれつつも、強い意志で耐え忍び、遂に初志

夕霧の恋（大井田）

を貫き、大臣を見返す。その間、惟光の娘に懸想したり（少女）、紫上や玉鬘を垣間見て心奪われることもあったが（野分）、雲居雁への想いは確固として揺らがない。右大臣や中務宮家との縁談も拒否する（梅枝）。「藤裏葉」で晴れて結婚を許された二人は、多くの子どもに恵まれ、幸福な家庭を築く。夕霧は母のぬくもりを知らない。雲居雁の母は内大臣と離縁し、按察使大納言と再婚した。そのような二人が、ようやく安住すべき家庭を得たのである。⁽¹⁾ 朱雀院の女三宮の婿選びから早くに除外されたのも、雲居雁との睦まじい夫婦仲ゆえであった（若菜上）。しかし、幸せだが平穏な夫婦生活は、やがて倦怠期を迎える。音楽のたしなみもなく、せわしく育児に没頭する雲居雁に、夕霧は幻滅を感じる。そして親友柏木の死後、その妻女二宮（落葉宮）を見舞うたびに奥ゆかしい人柄に次第に魅了されてゆく。宮への想いは深まり、夕霧巻ではついに強引に我が物としてしまう。怒った雲居雁は実家へ帰るのであった。夕霧巻は、所詮「まめ人」に過ぎない夕霧が恋物語の主人公を気取ることから起こる家庭喜劇を語る巻である。とかくプレ宇治十帖として理解されがちな「夕霧」巻であ

るが、宇治の物語には見られない喜劇的要素は重要である。しかしその喜劇が、宮や光源氏、紫上の立場から捉え直されると、深刻な悲劇の相貌を示すことになる。⁽³⁾ 本稿では、「夕霧」巻の夕霧に焦点を当てて「まめ人」の恋について考察したい。

一

しばしば「まめ人」と評される夕霧であるが、みやびな恋、あるいは色好みへの憧れがなかったわけではない。むしろ多感な彼の性格は、「少女」巻以降、繰り返し語られている。雲居雁と逢えぬ鬱屈した想いは、それを埋め合わせるかのように惟光の娘へと向かう（少女）。とりわけ玉鬘十帖においては、六条院世界の「みやび」、あるいは官能的なものに翻弄されるさまが繰り返し語られる。「野分」巻では、継母紫上を垣間見、その想像を絶する美しさに戦慄さえ覚える。紫上の美貌は、後々まで彼の心に深く刻み込まれることとなる。この巻では、異母姉と思ひ込んでいる玉鬘と父源氏の睦み合う姿態をも目撃し、大きな衝撃も受ける。姉ではないことを知ってからは、玉鬘に恋情を訴えてもいる（藤袴）。むしろ「まめ人」として恋情を強く自制すればするほど、人一倍深い懊悩を抱え込んでしまう、というべきであろう。夕霧の色好みへの願望を示すものとして、次の場面は興味深い。

文書きたまふ。紫の薄様なりけり。墨、心とどめて押しす

り、筆の先うち見つつ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。されど、あやしく定まりて、憎き口つきこそものしたまへ。

風騒ぎむら雲まがふ夕べにも忘るる間なく忘れぬ君
吹き乱れたる刈萱につけたまへれば、人々、「交野の少将
は、紙の色にこそととのへはべりけれ」と聞こゆ。「さばかりの色も思ひ分かざりけりや。いづこの野辺のほとりの花」
など、かやうの人々にも、言少なに見えて、心解くべくも
てなさず、いとすくすくしう気高し。

（新編日本古典文学全集・野分③二二三頁 以下、引用は本書による）

明石姫君を見舞った夕霧は、女房たちから硯を拝借して雲居雁に手紙を書いた。「風騒ぎ」の歌は、激しく吹きすさぶ野分に、雲居雁への狂おしいまでの恋心をたとえる。と同時に、紫上や玉鬘を垣間見た衝撃の大きさを物語つてもいる。「忘るる間なく忘れぬ君」とはいかにもぎこちない表現だが、率直で生真面目な彼らしい歌ともいえる。この歌を「吹き乱れたる刈萱」につけた真意について、従来は留意されてこなかったが、今井源衛氏は、「まめなれどよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」（古今六帖・第六・三七八五・刈萱）を引くと指摘した。⁽⁴⁾ まじめに振る舞つていても、よい評判があるわけでもない、いっそのこと刈萱のように、思いのままに乱れてみよう、という歌意

は、この場の夕霧の思いにいかにもふさわしい。引歌を理解できない女房たちは、有名な色好み、交野の少将を引き合いに出し、紫の紙との不調和を難じる。夕霧は、女房たちの無知を内心嘲笑いながら、「さばかりの色も」と自身の無粋を恥じるふりをするのだった。ともあれ「まめ人」を脱却し、交野少将のような「色好み」へと変貌したいという、夕霧のほのかな願望がうかがえる場面である。

続いて、「藤袴」の巻名の由来となった、それまでの恭しく生真面目な態度から一転して、夕霧が玉臺に恋情を訴える場面を見よう。

中将も、「漏らさじと、つつませたまふらむこそ、心憂けれ。忍びがたく思ひたまへらるる形見なれば、脱ぎ捨てはべらむことも、いともの憂くはべるものを。さても、あやしうもて離れぬことの、また心得がたきにこそはべれ。この御あらはし衣の色なくは、えこそ思ひたまへ分くまじかりけれ」とのたまへば、「何ごとも思ひ分かぬ心には、ましてともかくも思ひたまへたどられはべらねど、かかる色こそ、あやしくものあはれなるわざにはべりけれ」とて、例よりもしめりたる御けしき、いとらうたげにをかし。かかるついでにとや思ひ寄りけむ、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、「これも御覧すべきゆゑはありけり」とて、とみにも許さず持たまへれば、うつたへに

夕霧の恋（大井田）

思ひ寄らで取りたまふ御袖を、引き動かしたり。

同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも

道の果てなるとかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知らぬさまに、やをら引き入りて、

「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば薄紫やかごとならましかやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかか」とのたまへば、すこしうち笑ひて、「浅きも深きも、思し分く方ははべりなむと思ひたまふる。まめやかには、いとかたじけなき筋を思ひ知りながら、えしづめはべらぬ心のうちを、いかでか知らしめざるべき。なかなか思し疎まむがわびしきに、いみじく籠めはべるを、今はた同じと、思ひたまへわびてなむ。

頭中将のけしきは御覧じ知りきや。人の上に、など思ひはべりけむ。身にてこそ、いとをこがましく、かつは思ひたまへ知られけれ。なかなか、かの君は思ひさまして、つひに、御あたり離るまじき頼みに、思ひ慰めたるけしきなど見はべるも、いとらうやましくねたきに、あはれとだに思しおけよ」など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。

（藤袴③三三一―三三三頁）

玉臺が異母姉ではなく、同じく大宮を祖母とするいとこ同士であることが明らかになった。夕霧は、大宮の服喪にことよせて、玉臺への想いを打ち明ける。「御あらはし衣の色」（血縁を示す喪服

の色)の連想から同じく血縁、「紫のゆかり」の花である蘭を御簾の中に差し入れ、玉鬘の袖を捉えるのであった。「同じ野の」は、同じ野で露に萎れている藤袴——同じく祖母大宮を悼む涙にくれている従弟の私に、憐憫の情をかけてください、申し訳ばかりでも、の意。「東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりも逢ひ見てしがな」(古今六帖・第五・三三六〇・帯)を踏まえ、切実な想いを訴えるのである。「今はた同じ」は「わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」(後撰集・恋五・九六〇・元良親王)によるが、単なる言葉の綾にはとどまっていまい。色好みとして名高い親王の名歌を引くところに、夕霧の色好みへの憧れが仄めかされていよう。玉鬘の素性が明らかになるに及び、夕霧と柏木の立場は逆転した。柏木に羨望を示しつつ、「あはれとだに思しおけよ」と玉鬘の憐憫を乞うのである。先の和歌にも「あはれはかけよ」とあった。後に女三宮の「あはれ」を切望する柏木の原点がここにかがえるのではあるまいか。

二

ようやく「藤裏葉」巻で、雲居雁との結婚を許された夕霧であるが、若菜巻に至ると、次第に夫婦生活に倦怠を覚えるようになる。常に六条院の女君、とりわけ紫上の存在が理想的なものとし

て絶対視されることから、風流と無縁でいかにも家刀自然とした妻に失望するのである。長年連れ添ってきた紫上に対し、源氏は「去年より今年はまだ、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへる」(若菜上④八九頁)と日々新鮮な感動をおぼえるという。かかる源氏・紫上と対置されることで、すっかり時間に浸食されて無感動なものとなった夕霧夫妻の姿が明らかとなる。

大将の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意、気色の、ここの年経ぬれど、ともかくも漏り出で、見え聞こえたるころなく、しづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をもやむごとなく、心にくくもてなし添へたまへることと、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。わが御北の方も、あはれと思す方こそ深けれ、言ふかひあり、すぐれたらうらうじさなどものしたまはぬ人なり、おだしきものに、今はと目馴るるに心ゆるびて、なほかくさまさまに、集ひたまへるありさまどもの、とりどりにをかしきを、心ひとつに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御ほどを思ふにも、限りなく心ことなる御ほどに、取り分きたる御けしきにもあらず、人目の飾りばかりにこそと見たてまつり知る。わざとおほけなき心にもあらねど、見たてまつる折ありなむやと、ゆかしく思ひきこえたまひけり。(若菜上④一三四〜一三五頁)

紫上は女三宮に庄倒されることなく、むしろ優位に立っている。見事に身を処してゆく紫上への称賛を夕霧は惜しまない。その紫上と比べると、いかにも雲居雁の平凡さが不満である。さらには、その不用意さについて終始批判的であった女三宮に対して、興味を抱かずにはいられない夕霧であった。

大將殿は、君たちを御車に乗せて、月の澄めるにまかだたまふ。道すがら、箏の琴の変はりていみじかりつる音も耳につきて恋しくおぼえたまふ。わが北の方は、故大宮の教へきこえたまひしかど、心にもしめたまはざりしほどに別れたてまつりたまひにしかば、ゆるるかにも弾き取りたまはで、男君の御前にては、恥ぢてさらに弾きたまはず。何ごともただおいらかにうちおほどきたるさまして、子ども扱ひを、暇なく次々したまへば、をかしきところもなくおぼゆ。さすがに、腹あしくて、もの妬みうちしたる、愛敬づきてうつくしき人さまにぞものしたまふめる。(若菜下④二〇三頁)

女樂の帰途、夕霧は余韻に浸っている。六条院の女君たちはいずれも音楽の名手である、なかでも紫上の箏の音色が今もお耳から離れない。やはりここでも紫上思慕から、音楽のたしなみもなく育児に忙殺される雲居雁への幻滅へと転じてゆくのである。それでも時折示す、嫉妬の表情に可愛らしさを感じるのだという。幸福ではあるが物足りない日常に不満は募るばかりである。

夕霧が胸に秘めた、叶えがたい義母紫上への思慕、みやびやか

夕霧の恋(大井田)

な恋物語への憧れは、やがて亡友柏木の未亡人、女二宮へと向かってゆく。宮の後見を依託された夕霧は、弔問を重ねてゆくうちに、宮の奥ゆかしさに魅了されるようになる。次第に物寂しくなつてゆく一条宮の「あはれ」な風情も、恋心を掻き立てずにはおかない。

もの思ふ宿は、よろづのことにつけて静かに心細う暮らしかねたまふに、例の渡りたまへり。庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかしこの砂子薄き物の隠れの方に、蓬も所得顔なり。前裁に心入れてつくるひたまひしも、心にかせて茂りあひ、一叢薄も頼もしげにひろがりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けて、分け入りたまふ。(中略)御前の木立ども、思ふことなげなる気色を見たまふも、いとものあはれなり。柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを

(柏木④三三六〜三三七頁)

秋の夕べのものあはれなるに、一条宮を思ひやりきこえたまひて渡りたまへり。うちとけしめやかに御琴ども弾きたまひほどなるべし。(中略)月さし出でて曇りなき空に、翼うちかはす雁がねも列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらむかし。風肌寒く、ものあはれなるにさそはれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも奥深き声なるに、いとど心とまりはてて、なかなか思ほゆれば、琵琶を取り寄せて、

いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。

(横笛④三五二〜三五五頁)

荒廃した邸に、美しい姫君が寂しく琴を弾いているというのは、物語に頻繁に繰り返される類型である。引歌を重ねた風景描写も印象的である。いかにも恋物語の舞台にふさわしい一条宮の情趣は、やがて晩秋の小野の山里へと引き継がれてゆく。

さて、一条宮に足繁く通う夫に、雲居雁は次第に疑念を抱きよくなる。水も漏らさぬ仲だった二人の間に亀裂が生じ始めている。次の引用は、前掲「横笛」の一条宮訪問から夕霧が三条に帰宅する場面である。すでに格子は下ろされ、皆寝ているありさまである。「妹と我といるさの山の」と口ずさみ「今宵の月を見ぬ里もありけり」などと風流人を気取りつつ、一条とはうって変わった風情のなさに興醒めする夕霧であった。このように、宮のいる一条・小野と三条宮を夕霧が往き来することで、二つの世界を交互に、対照的に描きながら展開してゆくの夕霧の恋物語の基本的な方法であり、特徴である。

若君の寝おびれて泣きたまふ御声にさめたまひぬ。この君いたく泣きたまひて、つだみなどしたまへば、乳母も起き騒ぎ、上も大殿油近く取り寄せさせたまて、耳挟みして、そそくりつくるひて、抱きてゐたまへり。いとよく肥えて、つぶつぶとをかしげなる胸を開けて、乳などくくめたまふ。児もいとうつくしうおはする君なれば、白くをかしげなるに、御

乳はいとかはらかなるを、心をやりて慰めたまふ。男君も寄りおはして、「いかなるぞ」などのたまふ。撒米し散らしなどして、乱りがはしきに、夢のあはれも紛れぬべし。「悩ましげにこそ見ゆれ。今めかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて、夜深き御月めでに、格子も上げられたれば、例の物の怪の入り来たるなめり」など、いと若くをかしき顔して、かこちたまへば、うち笑ひて、「あやしの物の怪のしるべや。まる格子上げずは、道なくて、げにえ入り来ざらまし。あまたの人の親になりたまふままに、思ひいたり深くものをこそたまひなりにたれ」とて、うち見やりたまへるまみの、いと恥づかしげなれば、さすがに物ものたまはで、「いで、たまひね。見苦し」とて、明らかなる火影を、さすがに恥ぢたまへるさまも憎からず。まことに、この君なづみて、泣きむつかり明かしたまひつ。

(横笛④三六〇〜三六一頁)

夕霧のうたた寝の夢に柏木が現れたが、形見の横笛について尋ねようとした矢先、幼児の泣き声に「夢のあはれ」は破られた。国宝『源氏物語絵巻』にも絵画化された有名な場面である。懸命に子をあやす雲居雁の姿が注意されよう。「耳挟み」の語は、「帚木」の雨夜の品定めでの左馬頭の弁に見えた。「まめまめしき筋を立てて、耳挟みがちに、美相なき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして」という、家事ばかりに精を出している主

婦は、「うちも笑まれ、涙もさしぐみ」「あやなきおほやけ腹立たしく、心一つに思ひあまること」などには無関心で、話し相手にならないのだという（帚木②六三〜六四頁）。風流とは無縁で、家刀自らしい貫禄で子の世話に勤しむ雲居雁像の原点がここにあった。とはいえ、「いと若くをかしき顔」「憎からず」と、あるように、拗ねたり怒ったりする雲居雁に夕霧はむしろ可愛らしさを感じている。そして夕霧の俄風流を皮肉る雲居雁と、それを受け流す夕霧の言葉も、ぴつたりと呼吸が合っているのである。この会話は、夫婦の不和よりも、むしろ二人の築いてきた時間の重み、絆の深さをあらためて確認するものとなっている。関係が悪化するとしても、それは一時のことで、二人は離れることなどあり得ない。夕霧夫妻にとっては、女二宮との一件は、深刻な家庭崩壊——例えば『うつほ』の源宰相実忠や鬘黒大将が妻子を捨てて顧みなくなつたような——をもたらすようなものでは決してない。夕霧は何よりも生活者であつて、盲目的な恋に突き進んでゆく、破滅型ではないのである。

三

光源氏や柏木の物語の背後に紛れていた、夕霧の恋物語は、ついに「夕霧」の一卷を費やして正面から語られることになる。巻頭の「まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将」（夕霧④三九

夕霧の恋（大井田）

五頁）という揶揄的な語り口からも、この巻が異例の恋物語として展開してゆくことが予想される。以前から病気がちだった宮の母御息所は療養のため小野の山荘に転居する。一条宮よりもいっそう物寂しく風情ある地に舞台が移った。「都に二なくと尽くしたる家居には、なほあはれも興もまさ」る（夕霧④三九八頁）小野は、恋物語が演じられるにふさわしい場である。

日入り方になりゆくに、空の気色もあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗き心地するに、ひぐらし鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうちなびける色もをかしう見ゆ。前の前裁の花どもは、心にまかせて乱れあひたるに、水の音いと涼しげにて、山おろし心すごく、松の響き木深く聞こえわたされなどして、不断の経読む時変はりて、鐘うち鳴らすに、立つ声もる変はるも一つにあひて、いと尊く聞こゆ。所がらよるづのこと心細う見なさるるも、あはれにも思ひ続けらる。出でたまはむ心地もなし。（夕霧④四〇一〜四〇二頁）

「八月中の十日ばかり」の「野辺の気色もをかしきころ」（夕霧④三九七頁）に夕霧は小野へと赴いた。山里の夕暮れの景色が、やはり引歌を重ねた、視覚と聴覚を交錯させた文体によって描かれる。夕霧が帰るのを忘れてしまうのも無理はない。立ちこめてきた霧にかこつけて一夜を過ごし、言葉を尽くして想いを訴えるものの、宮がなびくはずもない。

夕霧は空しく帰るが、実事なき、後朝の文めいたものを宮に

贈つてきた。

「魂をつれなき袖にとどめおきてわが心からまどはるるかな
な

ほかなるものはとか、昔のたぐひありけりと思たまへなすにも、さらに行く方知らずのみなむ」などいと多かめれど、人はえまほにも見ず。
(夕霧④四一五頁)

「あかざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する」(古今・雑下・九九二・陸奥)、「身を捨ててゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり」(古今・雑下・九九七・躬恒)、「わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし」(古今・恋一・四八八・詠人不知)と引歌をくだしく並べ立てるのが、恋物語の主人公の風流なふるまいであると思ひ込んでいるらしい。が、どの引歌も似た趣旨のものばかりで曲がない。「いと多かめれど」とあるように、これはごく一部で、風流ぶつた冗長な文面が続いていたのだろう。これも馴れない恋物語の主人公を気取る、夕霧の滑稽さがよく示された場面である。

空しく帰る夕霧の姿は法師たちに見咎められた。律師から事の次第を聞かされた御息所は、宮と対面するが、真相は聞き出せない。御息所は、夕霧を詰る手紙を贈るが、雲居雁に奪われて読むことができない。この場面も、前掲「横笛」の夕霧邸の描写と同様、国宝『源氏物語絵巻』にも描かれ、有名である。

大將殿は、この昼つ方、三条殿におはしにける、今宵立ち

返りまでたまはむに、事もあり顔に、まだきに聞き苦しかるべしなど念じたまひて、いとなかなか年ごろの心もとなきよりも、千重にも思ひ重ねて嘆きたまふ。北の方は、かかる御歩きのけしきほの聞きて、心やましと聞きぬたまへるに、知らぬやうにて、君達もてあそび紛らはしつつ、わが昼の御座に臥したまへり。

宵過ぐるほどにぞ、この御返り持て参れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解きたまはで、御殿油近う取り寄せて見たまふ。女君、もの隔てたるやうなれど、いととく見つけたまうて、はひ寄りて、御後ろより取りたまうつ。「あさましよう。こは、いかにしたまふぞ。あな、けしからず。六条の東の上の御文なり。今朝、風邪おこりて悩ましげにしたまへるを、院の御前にはべりて出でつるほど、またも参うでずなりぬれば、いとほしさに、今の間いかにと、聞こえたりつるなり。見たまへよ、懸想びたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。(ア)年月に添へて、いたうあなづりたまふこそうれたけれ。思はむところを、むげに恥ぢたまはぬよ」とうちうめきて、惜しみ顔にもひこしるひたまはねば、さすがにふとも見で持たまへり。「(イ)年月に添ふるあなづらはしきは、御心ならひなべかめり」とばかり、かくうるはしだちたまへるに憚りて、若やかにをかしきさましてのたまへば、うち笑ひて、「そは、ともかくもあ

らむ。世の常のことなり。またあらじかし、よろしうなりぬる男の、かくまがふ方なく、一つ所を守らへて、もの怖ぢしたる鳥のせうやうの物のやうなるは。いかに人笑ふらむ。さるかたくなしき者に守られたまふは、御ためにもたけからずや。あまたが中に、なほ際まさり、ことなるけぢめ見えたるこそ、よそのおぼえも心にくく、(ウ) わが心地もなほ古りがたく、をかしきこともあはれなるすぢも絶えざらめ。かく翁のながし守りけむやうに、おれ惑ひたれば、いとぞ口惜しき。(エ) いづこのはえかあらむ」と、さすがに、この文の気色なくをこつり取らむの心にて、欺き申したまへば、いとにほひやかにうち笑ひて、「(オ) もののはええしき作り出でたまふほど、(カ) 古りぬる人苦しや。(キ) いと今めかしくなり変はれる御気色のすさまじさも、見ならはずなりにけることなれば、いとなむ苦しき。(ク) かねてよりならはしたまはで」とかこちたまふも、憎くもあらず。「(ケ) にはかにと思すばかりには、何ごとか見ゆらむ。いとうたてある御心の限かな。よからずもの聞こえ知らする人ぞあるべき。あやしう、もとよりまろをば許さぬぞかし。なほ、かの緑の袖の名残、あなづらはしきのことつけて、もてなしたてまつらむと思ふやうあるにや。いろいろ聞きにくきことどもほめくめり。あいなき人の御ためにも、いとほしう」などのたまへど、つひにあるべきことと思せば、ことにあらがはず。

夕霧の恋(大井田)

大輔の乳母、いと苦しと聞きて、ものも聞こえず。

(夕霧④四二七〜四三〇頁)

御息所の手紙を何としても見たい夕霧は、花散里からの手紙と偽り、平静を装う。この二人の対話に注目したい。まず夕霧の(ア)「年月に添へて、いたうあなづりたまふ」に雲居雁が(イ)「年月に添ふるあなづらはしき」と切り返す。夕霧は、脇目もせずあなた一人を守り続けてきたが、このような愚直な男に守られているのは、妻として不名誉である、多くの妻妾たちの中で最も重んじられるのが(六条院における紫上のように)世評も高く、夫の愛情も新鮮でありつづけるのだ、妻一人しか守れぬ夫に愛されて何の見栄えがあるうか、という理屈である。夕霧の(ウ)「わが心もなほ古りがたく」を雲居雁は(カ)「古りぬる人」と自身のこととし、夕霧の(エ)「いづこのはえ」を(オ)「もののはええしき」と切り返して皮肉る。(キ)の「今めかしくなり変はれる御気色」も、まめ人から色好みへと急変した夕霧へのあてこすりである。(ク)は、「かねてよりつらさは我にならはずでにはかに物を思はするかな(源氏積)」による。これまで恨めしい思いを私に馴れさせなかったのに、急に心変わりして物思いをさせることだ、の意で、まさに現在の境遇にふさわしい古歌を引いた。夕霧もこれを踏まえて(ケ)「にはかに」と応じ、雲居雁の疑念を払拭しようとする。雲居雁をなだめがたく思った夕霧は、矛先を大輔の乳母へと転じる。以前から「緑の袖」を軽蔑し

ていた乳母が二人の仲を裂こうとして、私の悪い噂をあなたの耳に入れるのだ、と。この一連の対話は、言葉と言葉が緊密に対応しているのに注意されよう。前掲「横笛」の対話のように、二人の呼吸はびつたりと合っているのである。長年連れ添った夫婦ならではと言うべきか。また、嫉妬を示す雲居雁の表情も「若やかにをかしきさま」「にほひやか」「憎くもあらず」とかえって魅力的だという。いかにも家庭喜劇らしい一コマである。

周知のように国宝『源氏物語絵巻』は、長大な「夕霧」巻から、この一場面のみを選んで絵画化した。趣深い山里の風景描写に富むこの巻は、絵画化する場面に事欠かない。「九月十余日」に小野を訪ねた夕霧の姿は「なつかしきほどの直衣に、色濃かなる御衣の打目いとけうらに透きて、影弱りたる夕日の、さすがに何心もなうさし來たるに、まばゆげにわざとなく扇をさし隠したまへる手つき、女こそかうはあらまほしけれ」（夕霧④四四八、四四九頁）と美しさが強調される。後代の源氏絵には好んで取り上げられる場面だが、国宝絵巻ではあえて夕霧夫妻の喜劇的、笑話的な場面を選んだのである。秋山光和氏は、「柏木」から「御法」の八段、いわゆる「柏木グループ」が、第一主題（「柏木」第一・二・三段、「鈴虫」第一・二段、「御法」）と第二主題（「横笛」「夕霧」）に大別されるとした。光源氏・紫上・柏木の物語を中心に描く第一主題に対して、夕霧の家庭内のささやかな出来事を描くのが第二主題であり、画面の幅も第二主題のほうがやや狭

いという^⑥。嫉妬する雲居雁が荒々しく夕霧から手紙を奪い取る、というこの場面こそ巻の本質を伝えていると絵巻作者は判断したのであり、まさに慧眼と評すべきであろう。

四

雲居雁に手紙を奪われ、夕霧は返事が書けなかった。夕霧の訪れもなく、宮の前途に絶望した御息所の病状は急変、世を去るのだった。誤解に次ぐ誤解が事態を悪化させてゆくのが、この巻の方法でもある。夕霧は御息所の葬儀を取り仕切り、しばしば舞っては厚志を示すが、宮が心を許すはずもない。やがて一条宮に連れ戻されると、そこには夕霧が待ち構えていた。宮が塗籠に籠もって抵抗するも空しく、夕霧は強引に契りを結んでしまうのだった。雲居雁は「限りなめりと、さしもやはとこそかつは頼みつれ、まめ人の心変はるは名残なくなむと聞きしはまことなりけり」（夕霧④四八二頁）と立腹し、姫君たちと幼い子どもを連れて、姉弘徽殿女御の里下がりしている父致仕大臣邸へと帰ってしまふ。三条殿に夕霧が戻ってみると、残された子どもたちが「見つけて喜びむつれ」「上を恋ひたてまつりて愁へ泣き」というありさまである。夕霧は急いで迎えに行くが、相手にもされない。喜劇的・揶揄的な筆致はここに極まっていよう^⑦。もちろん、これまで見てきたように、二人の夫婦仲は深刻な断絶などではなく、

すぐに修復可能なものである。雲居雁は姉弘徽殿に愚痴をこぼしているうちに機嫌も直り、間もなく子どもたちを連れて三条殿に戻ったことだろう。帰れる里がある雲居雁は幸せである。紫上も女二宮も、温かく迎えてくれる里などないのだから。多くの家族に恵まれた雲居雁に對置されることで、彼女たちの孤独な姿が浮き彫りになる。さて「夕霧」巻末は、雲居雁と藤典侍の間に儲けた、多くの子女たちの紹介で閉じられる。

この、昔、御中絶えのほどには、この内侍のみこそ、人知れぬものに思ひとめたまへりしか、ことあらためて後は、いとたまさかに、つれなくなりまさりたまうつつ、さすがに君達はあまたになりけり。この御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は、大君、三の君、六の君、次郎君、四郎君とぞおはしける。すべて十二人が中に、かたほなるなく、いとをかしげに、とりどりに生ひ出でたまける。内侍腹の君達しもなむ、容貌をかしよう、心ばせかどありて、皆すぐれたりける。三の君、次郎君は、東の殿にぞ、取り分きてかしづきたてまつりたまふ。院も見馴れたまうて、いとらうたくしたまふ。この御仲らひのこと、言ひやるかたなくとぞ。

(夕霧④四八九〜四九〇頁)

夫婦は平穩で幸福な生活を取り戻した。夕霧一門の繁栄を語るこの文章は、あたかも長篇物語の大団円をも思わせる。あるいは、

夕霧の恋(大井田)

『うつほ物語』「藤原の君」巻頭の源正頼の数多くの子女の紹介にも似ている。夕霧は早くも権勢家の相貌を示しつつあるが、それは同時に恋物語の主人公とはなり得ないことも意味しているはずである。雲居雁が憂慮し、大騒ぎしたほどには、この一件は夕霧夫婦にとって重大な出来事ではなかったようである。しかし、一番の被害者ともいべき女二宮はもとより、周囲の人々にとつては深刻なものとして受け止められたとおぼしい。光源氏・紫上・花散里、さらには朱雀院や致仕大臣などにも影響は及んでゆくのである。この巻にはほとんど登場しない光源氏や紫上の思いが、次のように語られる。

六条院にも聞こし召して、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人のそしりどころなく、めやすくて過ぐしたまふを、面だたしう、わがいにしへ、すこしあざればみ、あだなる名を取りたまうし面起こしに、うれしう思しわたるを、いとほしう、いづ方にも心苦しきことのあるべきこと、さし離れたる仲らひにてだにあらで、大臣なども、いかに思ひたまはむ。さばかりのことたどらぬにはあらじ、宿世といふもの、逃れわびぬることなり、ともかくも口入るべきことならずと思す。女のためのみにこそ、いづ方にもいとほしけれと、あいなく聞こしめし嘆く。紫の上にも、来し方行く先のこと思し出でつつ、かうやうの例を聞くにつけても、亡からむ後、うしろめたう思ひきこゆるさまをのたまへば、御顔うち赤め

て、心憂く、さまで後らかしたまふべきにやと思したり。女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれるべきものはなし、もののははれ、折をかしきことをも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしきも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかた、ものの心を知らず、いふかひなきものにならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、良きほどには、いかで保つべきぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。

(夕霧④四五五〜四五七頁)

光源氏は夕霧の件を耳にして心を痛める。自身の若い頃とは違い、思慮分別をもつて振る舞い、人から非難されることもなく過ごしてきた夕霧を誇らしく思っていたが、こともあらうにこんな不始末を起こしてしまった、しかしそれも「宿世」のなせるわざであり、口入れしても無意味である、それにしても宮と雲居雁が気の毒でならない、と思う。紫上もまた、この世に生まれてきても感動を押し殺し、口を閉ざして引き籠もっていたら、何の意味があるのか、それにしても女の身をどのよう処して生きてゆけばよいのか、と自問せずにはいられない。このように人間の業の深さ、女として生きることの困難といった問題が、晩年の源氏や

紫上によつて問い直されるのである。

「みな世の常のことなれど、三条の姫君の思さむことこそいとほしけれ。のどやかに馴らひたまうて」と聞こえたまへば、「らうたげにもたまはせなす姫君かな。いと鬼しうはべるさかなものを」とて、「などてか、それをもおろかにはもてなしはべらむ。かしこけれど、御ありさまどもにても、推し量らせたまへ。なだらかならむのみこそ、人はつひのことにははべめれ。さがなくことがましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに憚らることあれど、それにしも従ひ果つまじきわざなれば、事の乱れ出で来ぬる後、我も人も、憎げに飽きたしや。なほ、南の御殿の御心もちろこそ、さまざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそは、めでたきものには見たてまつり果てはべりぬれ」など、ほめきこえたまへば、笑ひたまひて、「もののためしに引き出でたまふほどに、身の人悪ろきおぼえこそあらはれぬべう。」

(夕霧④四七〇〜四七一頁)

夕霧の養母である花散里もまた、事のなりゆきに心を痛めていた一人であった。雲居雁の心中を思いやる、花散里の心配をよそのに、夕霧は「なだらか」であることこそが、夫婦にとつて肝要なのだと言う。雨夜の品定めにおける左馬頭の発言「よろづのことなだらかに、怨ずべきことをば見知れるさまにほのめかし、恨むべきふしをも憎からずかすめなさば、それにつけてあはれもまさ

りぬべし」(帚木①六七〜六八頁)と同じ、男の立場からの身勝手な論法である。夕霧は雲居雁を「さがな者」とするが、やはり左馬頭が指喰いの女を同様に呼んでいたことも想起される。そして紫上、花散里ら六条院の妻妾たちの態度を理想的として絶賛するのである。彼女たちの内面の苦悩や葛藤がまるで見えていない、無神経で不躰な夕霧の言葉に花散里は辟易し苦笑せざるを得ないのであった。⁽⁸⁾

むすび

見てきたように、「まめ人」夕霧が、柄にもなく恋物語の主人公を気取ったところから生じる悲喜劇が「夕霧」巻の主題である。中心となる夕霧と雲居雁の物語じたいは倦怠期を迎えた夫婦の、ありふれた家庭喜劇に過ぎない。しかしそれは、周囲にとっては深刻な波紋を投げかけてゆくのである。騒動を巻き起こした結果、自分が色好みにはなり得ないことを、夕霧はようやく理解したらしい。

あやしう中空なるころかなと思ひつつ、君たちを前に臥せたまひて、かしこに、また、いかに思し乱らむさま思ひやりきこえ、やすからぬ心づくしなれば、いかなる人、かうやうなることをかきしうおぼゆるらむなど、もの懲りしぬべうおぼえたまふ。

(夕霧④四八四〜四八五頁)

夕霧の恋(大井田)

夕霧にとって色恋沙汰とは、結局、煩わしい、心尽くしなものでしかなかった。もう恋はこりごりだと思ふところに「まめ人」らしさがうかがえよう。恋物語の主人公を演じるのは断念して、今は自分らしく生きてゆくことだろう。「丑寅の町に、かの一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける」(匂兵部卿⑤二〇頁)という「うるはし」さに、彼の滑稽なまでの生真面目さ、律儀さを見る。

注

(1) 「少女」から「藤裏葉」に至る夕霧と雲居雁の恋物語については、拙稿「夕霧と雲居雁の恋―「少女」から「藤裏葉」まで―」(河添房江編『源氏物語の感傷と基礎知識31 梅枝・藤裏葉』二〇〇三年、至文堂)で論じた。

(2) 石田穰二「夕霧の巻について」(『源氏物語論集』一九七一年、桜楓社)、上坂信男「小野の霧・宇治の霧」(『源氏物語とその心象序説』一九七四年、笠間書院)、伊藤博「夕霧物語の位相」(『源氏物語の原点』一九八〇年、明治書院)、篠原昭二「夕霧巻の成立」(『源氏物語の論理』一九九二年、東京大学出版会)、田坂憲二「夕霧巻の構造について」(『源氏物語の人物と構想』一九九三年、和泉書院)など、多くの論がある。

(3) 鈴木日出男「柏木の死後」(『源氏物語虚構論』二〇〇三年、東京大学出版会)、高木和子「夕霧物語から光る源氏物語へ」(『源氏物語の思考』二〇〇二年、風間書房)

(4) 今井源衛「伏せられた引歌―刈萱の場合―」(『紫林照徑 源氏物語の新研究』一九七九年、角川書店)

- (5) 田口栄一「源氏絵帖別場面一覽」(秋山虔・田口栄一編『豪華(源氏絵)の世界 源氏物語』一九九七年、学習研究社)
- (6) 秋山光和『王朝絵画の誕生―『源氏物語絵巻』をめぐる―』(一九六八年、中公新書)
- (7) 『うつほ物語』「国譲」下巻に、よく似た場面が見られる。太政大臣藤原忠雅は、新帝の即位式に暇文を出して不参であった。「かの北の方(正頼六の君)、親のもとに籠もり居たまへなれば、小さかりし子どもの騒ぐなるをこそもてあつかひてものしたまふなれ」(『うつほ物語全』七六三頁) というのがその理由であった。
- (8) 拙稿「みやびに生きる女たち」(『王朝物語の世界―『竹取』『伊勢』『うつほ』そして『源氏』へ―』二〇二二年、三弥井書店)

キーワード…夕霧、雲居雁、女二宮、まめ人

Abstract

夕霧の恋
(大井田)

Yugiri's love

Haruhiko Oida

There are some stories that a serious man (mamebito) turns into amorous in tales of Heian period. A man with a happy family suddenly has no regard for his wife and children. Yugiri is Hekaru Genji's son, and everyone says he is a mamebito. He was finally able to marry Kumoinokari his first love, after enduring many obstacles. The couple had many children. But he secretly harbored a longing for an elegant love affair. In particular, she had a secret crush on his mother-in-law, Murasakinoue, and his cousin Tamakazura. Eventually, he became a disappointment, devoting himself to raising his children with no musical talent. After the death of his friend Kashiwagi, he became attracted to his widow, the elegant Onna-Ninomiya (Ochibanomiya). Finally he was forced to marry her. In the chapter of Yugiri, his family comedy is told. The conversation between Yugiri and Kumoinokari corresponds closely to the language. He is newly moved by seeing his wife's adorable jealousy. She was angry with her husband for cheating on her and went home to her own family. But they never divorce. The scene in which Kumoinokari takes the letter from Miyasudokoro was depicted in a picture scroll that is a national treasure. This picture scroll is an accurate understanding of the subject matter of this volume. The comedy of the Yugiri family has serious repercussions for Hikaru Genji, Murasakinoue, Janachirusato, and others around them. He is only a serious man, even if he pretends to be the hero of a love story.

Keywords: Yugiri, Kumoinokari, Onna-Ninomiya, Mamebito